

散佚物語『霞へだつる中務宮』の復原

——六条斎院物語合考断章——

神 野 藤 昭 夫

一 はじめに

天喜三年(一〇五五)五月三日庚申の夜、六条斎院邸で物語を題とする歌合が開催された。この歌合において歌題とされた物語名は、当時よく知られた既存の物語などではなく、この日のために新作された物語を歌題とするものであり、主にその物語に登場する人物たちの歌を番わせたものである。歌合という形式を取ることで、実質的には物語合を試みたものとみてよい。

この日、物語を提出した十八人の女房たちは、斎院家の女房ばかりではない。時の帝後冷泉天皇の皇后である四条宮寛子(頼通女)や斎院の姉祐子内親王(母は前帝後朱雀天皇の妃で頼通養女であった姫子女王)など他家の女房も参加していた。この場には時の閑白であった頼通も参加していたことから知られる

ように、頼通傘下の人々の行事という側面をもち、当代の宮廷文学の一翼を示すものでもあった。

この実質的な物語合の席上、いちばん最初に提出されたのが女別当の「霞へだつる中務宮」という物語である。この物語については、これまで松尾聡・石川徹・萩谷朴・小木喬・鈴木一雄・樋口芳麻呂氏らによって考察が深められており、その物語内容の復原についても次第に理解が定まりつつあるように思われる。本稿の結論も諸氏の見解の粹を大きく出るものではないが、本物語合研究の一環として、この物語の復原についての知見の修正を試み、物語史的視点を加味してこの物語の意義について述べることにしたい。

この物語の資料として残されているのは、物語合歌一首、『風葉集』の所載歌三首の計四首である。以下、四首を順を追って検討することにする。

二 宮中から遠ざかった中務宮邸

―題号をめぐる―

物語合の記録として残されているのは、次の資料である。^(注)

A かすみへだつるなかつかさのみや

左

女べたう

こののへにいとどかすみはへだてつつ山のふもととは春めきにけり

(六条斎院天喜三年五月三日庚申歌合)

歌は「幾重にも幾重にも霞がこめてなおいつそう宮中をへだてて、ここ山の麓はすっかり春めいてきたのであつた」の意。物語名「霞へだつる」はこの歌に由来するとみてよい。この歌は中務宮によって詠まれたものとみられるということである。

ところで物語名「霞へだつる（＝霞がへだてた）中務宮」は、正確には「霞がへだてた中務宮邸」の意である（小木・樋口）。「こののへ」は「幾重に」と「九重の宮中」の意を懸けるとみてよいから、宮中から隔てられた山のふもとに中務宮の邸はあつたことになる。

九重



山の麓（中務宮）

という図式である。帝のいる「九重」と中務宮のいる「山の麓」との間に疎隔あるいは対比関係のあることを読み取ることができる。

この歌については、『源氏物語』にみえる朱雀院の歌との類似が指摘されている。

九重をかすみ隔つるすみかにも春とつげくるうぐひすの声

〔少女〕巻 日本古典文学全集②―六六六―

今は退位している朱雀院の御所（九重をかすみ隔つるすみか）に、光源氏とともに冷泉帝が行幸し、夕霧の放鳥の試みについで遊宴が語られる場面のもの。当該の頭注には「春と……声」は、帝と源氏の来訪をさし、春鶯囀を含める。それによつて春の訪れを知つた、とする。うれしさと嘆かわしさとの交錯した表現。」と解説する。

すでに指摘されているところだが、

九重に	いとど	かすみへだてつつ	＝	中務宮
九重を	＝	かすみ隔つる	＝	山のふもと
			＝	すみか

ということになるので、この『源氏物語』歌を下敷きにするならば、題名の「中務宮」が「中務宮邸」の意であることと、中務宮が何らかの事情で王権から遠ざけられ疎外されていることを押さえることができる。

なお、本歌と類似の表現をもつ他の歌についてもいちおう検討しておく。

同じ『源氏物語』には、鬚黒大将のものとなった玉鬘が尚侍として宮中に出仕したもののたちまち退出するおり、冷泉帝は、九重にかすみへだてば梅の花ただかばかりも匂ひこじとやと詠んでいる。「幾重にも霞に隔てられることになれば」の意で、ここでも「九重」は「幾重にも」と「宮中」の意を懸ける。「霞」による疎隔を表現する。

この場合、「霞」による疎隔の対象が玉鬘⇨へ女であることに注意される。「霞」が隔てる対象がへ女である用例には、勾宮が一年前の初瀬詣での帰途に、中の君と贈答したことを思い出して

つてに見しやどの桜をこの春はかすみへだてず折りてかざさむ
（「椎本」巻⑤—二〇五）
と詠んでいる例がある。やどの桜は中の君をさしており、よそながらの意を「霞」が隔てたと表現していることになる。

また六条斎院祿子内親王の姉である祐子内親王に仕えた紀伊には、

思ひやる心ばかりはかよふらむかすみへだつる関路なりとも
（『新千載集』巻第七・離別歌・七五三）
がある。この歌の詞書「三月一日ころる中にゆく人に」からは相手はへ女とは決められないがへあなたを思う心だけはいく

ら霞が隔てても通いますわ」の意で、人と人との障壁としての霞の用例ということになる。

こうした例からするならば、物語名の「霞へだつる中務宮」からはへ霞が（宮中にいる女との仲を）隔てている中務宮邸の意とみうる可能性がまったくないわけではない。^{（注8）}だが、物語歌「このへに」の歌とからめて考えるとき、やはり霞によってへ九重そのものから隔てられている（山の麓（中務宮邸））を意味するとみるのが穏やかであろう。

さらに下句「山のふもとは春めきにけり」という表現についてふれておく。

平兼盛に、

ふるさとははるめきにけりみよし野のみかきのほらもかすみこめたり
（天徳内裏歌合二ほか）

という歌があるように、「このへに」の歌もまた、「霞」をみて「春めいてきた」と判断するのであると思われる。つまり幾重にも霞がこめた風景をみて「ここ山の麓は春めいてきた」との感慨を洩らすわけであって、この点からも宮中に遠ざけられているへ女の印象は希薄だということになる。

三 悲嘆する左大将とかなわぬ恋の対象

『風葉集』の所載歌は、春の暮れに死期を予感した左大将の歌一首と宮中の遊宴の翌朝左大将の笛の音を賞賛した帝の歌と左大将の返歌の贈答歌一組二首である。前者は、次のようであ

る。

B

春のくれつかた、ここのたのもしげなくおぼえければ

かすみへだつるの左大将

幾かへり春の別をしみきてうき身をかぎる暮にあふらん

〔風葉集〕巻十六・雜一・一一八二

詞書は「春も終わろうとするころ、長く生きられそうにもなく思われたので」の意。

歌は「何度春との惜別を経験してきたその結果、こうして辛いわが人生を閉じめる春のしかもその夕暮れに出会うことになったのか。」の意。

「かすみへだつるの左大将」とあるのは、『霞へだつる』物語の「左大将」の意である。題号からするならば、中務宮が主人公であるようにみえるが、残された資料内容からすると、左大将の嘆きと彼が帝の賞賛をあびる美質の持ち主であることが知られ、主要な登場人物であったことがわかる。ところで彼はどうして我が身を「うき身」と嘆じていたのか。類似表現を手がかりに考えてみたい。

霧が

『源氏物語』「藤裏葉」巻では、雲居雁との結婚を許された夕霧が
いくかへり露けき春をすぐしきて花のひとくをりにあふ

らん

〔藤裏葉〕巻 ③—四三一—

と詠んでいる。「いくかへり」「春」「あふらん」という共通措辞はもつものの、こちらは「何度涙ながらの春を送って花のひとくのように望みのかなう時にあうことになったのでしようか」と望みのかなった喜びの歌になっている。

また、『蜻蛉日記』（中）では、左大臣藤原師尹家の屏風歌に、道綱母が、

おほぞらをめぐる月日のいくかへりけふゆくすゑにあはん
とすらん

と詠んでいる。「人の家に、賀したところあり」とあるように、賀歌であるが、「いくかへりくあふ」という発想類型があり、この場合も「賀」に結びついている点に注意される。

だが、B歌の「いくかへりくあふ」が「賀」と結びついた用例などではないことは明らかである。そこで、『能宣集』に、次のような歌がみえることに注目したい。

としをへていひわたり侍りける女の、さすがにけぢかく
はあらざりけるにほるのすゑつかたいひつかはしける

能宣朝臣

いくかへりさきちるはなをながめつつもののおもひくらす春
にあふらん

『能宣集』一〇一七

長年口説きつづけているが、契りを交わすにはいたらなかった女に春の末頃に贈ったもので「何度咲いては散る桜の花をみて、もの思い暮らす春に会ったことか」というもの。

〈春の暮れ〉という状況、へいくかへり〉あるいは〈春に〉

あふらん〉という措辞など、『霞へだつる』の当該場面は本歌と重なる点が多い。『霞へだつる』が本歌を下敷きにしていたかどうかの判断については慎重でなければならぬと思うが、ここではへいくかへりあふらん〉の発想が恋の嘆きとして用いられている点に注目したいと思うのである。この『能宣集』の用例を重ねてみると、Bが詞書に「こちのたのもしげなく」といい、歌に「うき身」というが、これは恋の嘆きによる述懐として押さえることができることにはなるのではないか。

つまり左大將は、実らぬ恋の嘆きのあまり死期の近いことを予感して本歌を詠んでいるわけだ。「うき身をかざる」とあるように、その恋は長年にわたるかなわぬ恋であつたのである。そのような不如意の恋の担い手として左大將は登場するのである。では、左大將の思慕する女とは誰であつたか。

手許に残された資料に、女性が登場しない。どのような女性であるか、仮説するほかない。この〈女〉こそ中務宮の娘ではないか（これを仮説①とする）。これをはつきり想定したのは小木喬氏（木下）であり、樋口氏（樋口）もこれを支持している。

今は〈九重〱王権〉から何らかの理由によつて遠ざけられ、へ山のふもとに隠栖している中務宮。その娘とのかなわぬ恋。こうした設定は、『源氏物語』でいえば、宇治十帖の設定と類似する。

人間関係についていえば、ほぼ次の設定に進ずるものとみて

よいと思う。

八宮 — 大君 — 薫
中務宮 — (女君) — 左大將

だが、本歌から推察するに、女君が大君のように世を去るということではないらしい。むしろ女君に愛を受け入れてもらえず、「うき身」の果てに死ぬばかりの嘆きを味わう左大將に物語の焦点があるということではないか。

左大將の運命について、小木氏は「その嘆きによつて大將は世を去つたもののように考えられるのである。」と述べ、樋口氏はこの点には異を唱えて「左大將は焦がれ死にしようにはなるが、恋はハッピーエンドに終るのではあるまいか。」と述べる。樋口氏は本歌が哀傷ではなく、雑一にあることと当時の左大將が教通であつたことを視野に取めての判断である。（雑一）

左大將が亡くなつたかどうかについてはなんともいえない。このような場合、『風葉集』の配列が参考になることがあるので、本歌の次の歌（一一八三）をみると、

中宮御いろにて、さとおはしましけるに、やよひの
つごもりに聞えさせ給ひける

よその思ひの御門の御歌
霞ゆゑいとふ日数の袖の色に春ををしまぬ春も有りけり
とある。中宮がおそらく父の喪に服しているところに帝から届

けられた哀傷歌であらう。一一八二と一一八三への配列には、左大将の死と中宮の服喪という共通項としての〈死〉を立ててみることができるならば、左大将の死をおぼろげながら別の側面から確認することができることになる。

だが、雑一のこの前後の配列をさらに書き出してみると、

恋しきによそへてみれどなぐさまでをるに物うきやどの藤浪（一一八〇）

数ならぬ身には雲ゐの藤の花こころの松もいかがしるべき（一一八一）

幾かへり春の別ををしみてうき身をかぎる暮にあふらん（一一八二）

霞ゆゑいとふ日数の袖の色に春ををしまぬ春も有りけり（一一八三）

うちそへて我もこゑにやたててまし山時鳥なきわたるなり（一一八四）

うき世には我すみ侘びぬ郭公しでの山ちのしるべやはせぬ（一一八五）

しでの山しるべとたのむ時鳥夜にまどひたるこゑの聞ゆる（一一八六）

となつてゐる。

物うき・藤浪↓数ならぬ身・藤の花↓春の別・うき身↓

（霞）・春ををし（まぬ）↓山時鳥↓郭公・しでの山ち↓し

での山・時鳥

となつており、この間の配列は、季節の推移を景物によつて示すという原則に類似表現が絡ませられて配列させられているとみてよい。つまり、一一八二と一一八三の間に〈死〉の共通項を読みとり、左大将の死を積極的に想定する根拠にするのはむしろかしいように思う。

また、ハッピーエンドに終わつたとみるのはいかがか。この物語の主眼は左大将の実らぬ恋の嘆きをえがくところにあつたとみなければならぬまい。

後節（六）でふれるように、俊成は本歌を踏まえたと思われる歌を詠んでいる。本物語の中でも印象深い哀切な場面であつたと推測される。

四 帝の賞賛と姫宮降嫁の想定

次に帝と左大将の贈答歌について検討することにしたい。

C1 左大将御あそびに笛つかうまつりて侍りけるあしたに
給はせける

霞へだつるの御門の御歌

たぐひなく心にすみし笛のねは月の都もひとつなりけり

C2 御かへし

笛の音は月の都にとほけれど清き心や空にすみけむ

〔風葉集〕卷十七・雑二・一三二七・一三二八

詞書によれば、左大將が御遊に笛を吹いた。その翌朝、その笛の音を賞て帝が歌を賜ったという。

C1の歌意は「比べもののないほど澄んで聞こえたそなたの笛の音は、月の都にいても同じであつた」というもの。

それに対し、左大將の返歌C2は「私の笛の音は月の都の音色とは似ても似つきませんが、私の清らかな心ばかりは空に澄みのぼつたことと存じます」の意とみたい。

なお樋口氏は帝の歌を「月の都でも同じように聞こえるだろうよ」と訳し、左大將の返歌を「私の吹く笛の音は、月の都に届くには遠すぎますが」と訳しておられる。「ひとつ」と「とほけれど」の対応からは、樋口説の訳が妥当と思ひますが、「月の都」という異郷に対する憧憬を積極的に読み取ることによつて、音楽をとおして左大將の理想性が表現されているとみたい。「月の都」に対する観念については『竹取物語』はあげるまでもないが、

あまのはら雲のかよひちとどてけり月の都の人もとひこず

〔夜の寝覚〕巻一・一

もの思ひけるころ、ことにひきける

ことうらの煙の中納言更衣

あまをとめ月の都にさそはなん跡とどめじと思ふこの世を

〔風葉集〕一二八二

さかの院の御賀の御あそびの夜月やうやうさしいで
て、雁のいとちかくつらねたるに

あまのもしほびの院御うた

雲あゆく雁のつかひにことづてて月のみやこの人やとふらむ
〔風葉集〕七三七

など、「月の都の人」・「月の都のあまをとめ」といったかぐや姫的な映像を核にもつていたらしい。

ところで、「笛の音」と「月の都の人」との関連でいえば、『狭衣物語』(巻二)において、狭衣の吹いた笛の音をめでて、天稚御子が迎えにくる場面が想起される。

帝の従容をはじめは固辞していた狭衣だが、「もて悩みながら吹き出で給へる笛の音、雲の上まで澄み上るを、上を始めたてまつりて、候ふ人、すべて九重のうちの人、聞き驚き、涙を落さぬはなし」というありさまであつた。そのうち「此笛のうへに、さまざまの物の音ども空に聞え」という奇瑞がおこるが、狭衣は、

いなづまの光に行かむ天の原はるかに渡せ雲のかけはし
と音の限り吹く。げに月の都の人、いかでか聞き驚かざらん」という草子地に導かれて、天稚御子が降りて来る。そして狭衣に「いとゆふのやうなる物」(「天の羽衣か」)を着せ、天に昇つてゆこうとする。

驚いた帝は、狭衣の手を必死に捉えて離さない。この様子に天稚御子もついに諦めて天に返つてゆく。

此中將の今宵の笛の音に、天人だに聞き過し給はで天降り遊び給へるを、「われ泣くく、ひき留めて、たゞにあらん

は、無下にあるまじきことなり。」

というわけで、

「〔女二の宮の〕此頃の御有様は、さりととも見たてまつりなば、天竺へも懂れじ」

と考えた帝は鍾愛する女二の宮を狭衣に降嫁させることを決意するわけであつた。

『狭衣物語』のこの天稚御子降下の場面は、この世のものならぬ美質を備えた狭衣の超越的な理想性・主人公性を表現するとともに、それが女二の宮を賜ることに結びついているところに構想上の意味がある。そしてこの女二の宮の降嫁の話は、源氏の宮を思慕する狭衣には秘められた恋の障害でしかありえないわけであつた。

今、この〈笛の音〉と〈月の都〉という共通項に注目するならば、『狭衣物語』は『霞へだつる』の当該場面を取り込んだものとみて誤らないのではないか。左大将が笛を吹く。それは月の都の人にも劣らぬ技量なのであつた。このような場面が『狭衣物語』では、月の都から天稚御子が降下してくる発想を導き出してきているのだ。『狭衣物語』は、明らかに『霞へだつる中務宮』を取り込むことによって、自己の物語世界を組み立てているといえる。

と同時に、逆に『狭衣』を下敷きにすることによって、『霞へだつる』の復原のヒントが得られることにもなる。

帝—女二の宮

狭衣

帝—〔姫宮〕

左大将

『霞へだつる』の当該場面に戻ると、左大将の吹いた笛の音をめぐって、賞賛の歌の贈答を通じて、左大将の理想性が表現されているとみたわけであつた。この点については問題のないところである。

だが、一方、左大将には思慕する女性があり、そのかなわぬ恋のために、死に直面するほど悩んでいるのであつた。

そこに帝の姫宮を想定し（これを仮説②とする）、姫宮降嫁の話が絡んでいると仮説してみたいのである。そのことによつて、左大将の实らぬ恋の嘆きの主題が複雑化してくることになる。

左大将と中務宮とその姫君との関係が、薫と八の宮と大君との関係に重なり合うことについてはすでに述べた。

②の仮説の関係は、『狭衣物語』を媒介してみたが、薫との照応としてこれを見ることもできる。『源氏物語』では、「宿木」巻であきらかになるように、薫は当帝の女二の宮を妻に迎えているのであつた（A図）。

もとより『源氏物語』においては、大君思慕と女二の宮降嫁の話とはせめぎあう関係として主題化されて書かれてはいない。これを『霞へだつる』では、左大将が中務宮の姫君への思慕と帝の女宮の降嫁の話との間で苦しむというふうに結びつけ

主題化したのではあるまいか (B 図)。

(A 図)

八の宮—大君

中務宮—(女君)

(B 図)

—薰—

—左大将—

(C 図)

源氏の宮

—狭衣—

今上帝—女二の宮

帝

—(女宮)—

帝

—女二の宮

ここに『狭衣』の人間関係をおいてみたのが C 図である。『狭衣』では、源氏の宮との恋を妨げる存在として登場したはずの女二の宮であったが、狭衣が女二の宮の美質に気づいたときには取り返しがつかない事態に立ち至っている、というふうにな如意の恋が連鎖的に繰り返されてゆくところに特色がある。

このように図式化してみると、『源氏物語』における薰をめぐる人間関係の設定が、『霞へだつる』を媒介として、『狭衣物語』へと変換されてゆく事情が、すつきりみえてくるのではないだろうか。

五 『霞へだつる中務宮』の復原と物語史的位置

ここまでの復原の手続きと内容を整理してみたい。

本復原案の要は、中務宮に姫君の存在 (仮説①) を、帝に姫宮の存在 (仮説②) を想定し、左大将に配するところにある。どちらがより重要かといえば、仮説①は動かさないと。物語の筋としては単純になるが、②は想定しない復原案もありう

る。だが、C 場面が『狭衣物語』に与えた影響は動かないところであって、その場合、この場面を姫宮の降嫁と結びつけ、それをさらに狭衣の不如意の恋の主題と連鎖させて、独自の展開を図ったところに『狭衣物語』の個性がきわだつことになる。

ところは、宮中から離れた山ふもとの中務宮邸。中務宮は、何らかの理由によつて、ここに隠栖し、閑寂な生活を送っている。俗なる空間としての宮中から隔たつた山ふもとに霞がたち、春めいてくる。そうした季節の変化と今の境遇をすずかに受け入れている中務宮がいる。あるいは仏道修行にいそしむ身であったかもしれない。

その中務宮に姫君がいた。どのようなきつかけからか、その姫君に左大将が思いを寄せるようになった。だが、父宮のそばで育つた姫君は世俗的な結婚はきっぱり諦めている。左大将は嘆きをかさねるほかない。

その左大将は、都世界では並ぶもののない貴公子なのであった。ある夜、帝の御前で管弦の遊びが催された。帝の勧めにもなかなか従わない左大将であったが、ついに笛をとり吹き澄ました。その笛の音は嫋々と澄みのほつて、月の都の楽のように聞こえた。

翌朝、帝からお褒めのことはある。そればかりではない。かねてより左大将の将来を囑望されていた帝は姫宮まで賜ると

いう。

中務宮の姫君へのかなわぬ思いと意に染まない姫宮との結婚話。俗世を離脱することばかり考えている左大將は嘆きのあまり、世をはかなむ気持ちから病の床に沈むのだった。時に春の暮れ。何度、春との惜別を繰り返してきたことか。だが、つらい我が身もこの春の暮れとともに終わるのだ。そう左大將を嘆きを深めるのだった。

いささか通俗的だが、右のような筋がたどれようか。

この左大將が今後どうなったか。彼の恋がハッピーエンドにおわつたと見る樋口説には従えない。たとえハッピーエンドにおわつたとしても、文学的主題がそこにあつたとはいえないと思う。また小木説のように左大將がこののち亡くなったとすると、男君の死によつて物語が閉じめられることになるのでこれもまたいかながな想定かと思う。

この物語は理想的な男君がかなわぬ恋に嘆く、その姿をえがくところに狙いがあつたのだと思うのである。これは、本物語合の他の物語の主題とも通底する特色であつて、斎院という男性との俗なる結婚を許されない世界の論理と『源氏物語』宇治十帖のかなわぬ恋を嘆く薫の主題との交点にこの物語（あるいはこれらの物語群）が位置していることを示しているといえるのである。

本物語合中でもっとも期待されたのは、小弁の『岩垣沼』であつたが、この物語も深く『狭衣物語』に影を投げかけている。見てきたように『霞へだつる』もまた『狭衣物語』に繋がる場面と主題をもつ。観点を変えていうならば、『狭衣物語』がいかに斎院サロンの物語群をモザイクのごとくに取り込んでいるかということが示唆されていることにもなる。だが、これは『狭衣物語』という作品の個性を貶しめるものであるより、『狭衣物語』という作品のサロン文芸性をあかすものとみるべきであらう。さまざまな引用から成り立つところに『狭衣物語』という作品の特質があつたことである。

六 作者女別当と『霞へだつる』の享受史のひとこま

さいごに断片的な問題二点についてふれておきたい。

最初に作者の女別当について。

女別当というのは、彼女が斎院の女別当であることを示す。

萩谷朴氏によつて、永承三十四年（一〇四八、九）と推定されている六条斎院歌合としてはもっとも早い歌合のなかに別当の名がみえる。この歌合にみえる十二人の歌人はいずれも女房とみえるので、この別当も女別当のこととみてよい。二十五度に及ぶ歌合記録のなかに彼女の名がみえるのは、この二度にとどまる。もっとも斎院退下後は女別当の役職はなくなるわけであるから、後半に女別当の名があらわれないのは当然である。本物語合の席上、一番左に登場し、その後名のみえないことと絡

めてみると、彼女は斎院における年かきの有力女房であつたのではないかと推定される。

『出羽弁集』には次のような歌がみえる。^(注15)

おまへにおほえたなるさくらをうへさせ給たる花のいとをかしう見ゆるを、わかおほむこゝろからしも、あをのみして、べたうとのゝたまたる

雲ゐまてにほふと見れとゝもすれはかすみへたつるはなさくらかな

御かへし

くものうへにゝほひをちらすさくらはなかつみもいかゝへたてやるべき

〔出羽弁集〕二二・二三

『私家集大成 中古Ⅱ』所収の本文(書陵部本五〇一・一三八)を掲出した。「しも、ゐ」は「しもゐ」、「して」は「したまて」と考えて、試みに次のように解釈しておきたい。

斎院の御前に大枝の桜をお植えになつたが、その花が美しく咲いている。ところがご自分のお気持ちから局に下がつておられながら、別当殿が次のように歌を詠んでこられた。

満開の桜は、御前のおられる雲居にまで色美しく映えてい
ると見てはいますが、どうかするとその花桜を霞がへだてて
見えないのが残念ですわ。

そのお返し

ここ御前のおられる雲の上まで美しさをまき散らしている
桜花ですもの、霞だつてどうして隔てることができるでしょ

うか。

ここに登場する「別当殿」も女別当と同一人物であろう。出羽弁はこの物語合では『あらばあふよのとなげくみぶ卿』を提出しており、『岩垣沼』の作者小弁と贈答を残しているが、後冷泉後宮の筆頭女房格の存在であり、女別当もまた斎院の有力な存在であつたとみることが出来る。さればこそ一番左の榮譽を担つたのかと思う。

次に俊成に本物語歌の類似歌があることについて。
本物語の類似歌を調べているうち、俊成に次のような歌があることにあらためて注目させられた。

① いくかへり春のわかれをしみきぬみどりの空もあはれとはみよ

〔新千載集〕卷二・春歌下・一八七／正治二年百首歌たてまつりける時／皇太后宮大夫俊成ほか

② ゆくはるはしらずやいかにいくかへりけふのわかれをしみきぬらん

〔続後撰集〕卷三・春歌下・一六七／はるのくれの歌とて／皇太后宮大夫俊成ほか

③ 久方の月のみやこもいかゞあらんかものはらの有明の空

〔玄玉集〕二五／かものみやに百首の歌奉られける中に／

皇太后宮大夫俊成卿)

④ 秋の夜はひかりをことにそへよとや月の都にさだめおき
けん

〔千五百番歌合〕一四一七／七百九番 右勝 釈阿)

⑤ 雲よりなれし山ぢを今更にかすみへだててなげく春か
な

〔続拾遺集〕巻第七・雑春歌・四七六／四位の後崇徳院の
還昇いまだゆるされざりけるころ、百首部類してたてまつ
りけるついでに／皇太后宮大夫俊成、『長秋詠藻』三六九
すでに萩合朴氏^{（註5）}によって指摘されているように、①②は、B

の

いくかへり春のわかれをしみきてうき身をかざる暮にあ
ふらん

を踏まえるとはぼ特定できるのではないか。

③④はC、⑤はAの類似表現をもつものをあげてみた。こち
らだけを見るならば『霞へだつる』歌によつたものと特定する
ことは困難であるが、①②とあわせみると、俊成が『霞へだ
つる中務宮』を読んでおり、その歌の表現を記憶にとどめてい
たかもしれない可能性がある。物語合ののち、『風葉集』にいた
るまでのこの物語の享受史の空白を埋めるひとこまとして注目
しておきたい。

〔注〕

注1 松尾聡「霞隔つる中務宮の物語・あらば逢ふよのと嘆く民部卿の物
語」『平安時代物語の研究』昭30・6 東寶書房

注2 石川徹「平安朝に於ける物語と和歌との相互関係に就いて」『古代小
説史稿』昭33・5、刀江書院

注3 萩合朴『平安朝歌合大成』第四卷（二九六〇・七初版、一九七九・八
復刊）

萩合朴校注『歌合集』（日本古典文学大系 昭40・3・岩波書店）
注4 小木喬「霞へだつる中務宮」『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』
（昭48・2、笠間書院）

注5 鈴木一雄「六条斎院家物語合の作者たち」『堤中納言物語研究序説』
（昭55・9、桜楓社）

注6 樋口芳麻呂「霞隔つる中務宮」物語「平安・鎌倉時代散逸物語の研
究」（昭57・2、ひたく書房）

樋口芳麻呂『王朝物語秀歌選』（上）一九八七・一一、（下）一九八
九・二、岩波文庫）

注7 歌集の本文は、特に注記しないかぎり『新編国歌大観』に拠った。

注8 かつて「物語文学総覧七〇〇」（神野藤昭夫・原国入・藤井貞和執筆
『国文学解釈と鑑賞』昭55・1）の「霞へだつる中務宮」の項では、こ
の立場にたつて解釈を試みた。その後、樋口氏（前掲書）によって批判
を受けた。

注9 小木 前掲『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』

注10 樋口 前掲『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』

注11 樋口 前掲『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』

注12 樋口 前掲『王朝物語秀歌選』下

中野莊次・藤井隆『増訂校本風葉和歌集』（昭45・1、友山文庫）に
よつて、本文の異同を記しておく（詞書に異同はない）。

たぐひなく心にすみし笛のねは月の都もひとつなるらん
りけりー丹嘉
りけんー（竜）浅阿

は—竜　や—丹浅阿なん—竜

笛の音は月の都にとほけれと清き心は空にすみけむ

注13 三谷栄一・関根慶子校注『狭衣物語』（日本古典文学大系（昭40・8、

岩波書店）

注14 本物語合に出席し『玉藻に遊ぶ権大納言』を提出した六条斎院宣旨

が、後年『狭衣物語』を執筆したことを思い合わせたい。

注15 神野藤昭夫『散佚物語『岩垣沼の中將』の復原とその物語史的位相—

六条斎院物語合考断章』『源氏物語と平安文学』第3集（近刊、早稲田
大学出版部）

注16 石川徹・萩谷朴・樋口芳麻呂氏らの既に指摘するところである。

注17 『新編国歌大観』も同じ書陵部本を用いて本文を立て「おまへにおほ
えだなるさくらをうゑさせ給ひたる、花のいとをかしう見ゆるを、わが
おほむころからしも、ゐをのみしてへだうどのたまたる」とする。

注18 萩谷朴 前掲『平安朝歌合大成』第四卷